

巻頭言 皆様方はどう生きるか

日本教職員バドミントン連盟会長
関場 武



先日、たまたまTVをつけたところ、「ビートたけしのスポーツ大将」で、ソノカムが中学生ペアを相手に打ち合っていた。得点に大きくハンディがつきルールもかなりめっちゃめっちゃなものであったが、今をときめく園田君・嘉村君が懸命にシャトルを追っていた。結果はソノカムの勝利になるのだが、嘉村君が、僕らの中学生時代と違って、レベルがとても高くなっている、それだからこちらも真剣に一所懸命闘った旨のコメントをしていた。(これって最高の褒め言葉だと思うけれど、当の中学生たちは判ってくれただろうか?)

それから日を置かずして、別の番組でタレントの中居君とテニスの嘗ての名プレイヤー杉山愛さんが組んで、奥原選手と2対1のゲームをしていた。奥原選手が適当にあしらい、最後は緩い球に対応できず中居君の空振りに終わるのだが、こちらはよくある手抜きゲーム、オチャラケで、番組の約束事とは言え小生にとって愉快ではなかった。

だいぶ前のことになるが今までに小生が見た最高のエキジビションは、ヨネックスオープンジャパンで行われたそれ。たしか決勝戦の日に男子ダブルスともう1種目に棄権が出てしまい、主催者側が急遽用意した男子ダブルスの試合である。準決勝で敗退した選手を含むインドネシアと韓国の本来のペアを崩し、インドネシア・韓国という組合せにして行われたそれは、ハイレベルな打ち合いの中にインドネシアの選手のエンターテイメント的なパフォーマンスが混じって、観衆を沸かせ、審判の手伝いをしていてとても楽しい試合であった。5種目のうち2種目も試合が無くなり、折角来たのにと何か損したような気分にある観衆を、幾分かでも満足させてくれるものであった。

ところで、これも少し前のことになるが、ここ10年余り夏の終わりに行われているジュニアスポーツアジア交流大会での一コマ。最近は見違えるようにレベルアップして来たが、はじめの頃、ウランバートル(モンゴル)の出場選手たちは、可哀そうなほど力が無かった。その中で、容赦なく打ち込んでくる対戦相手もいたが、小生が感動したのは、或男子シングルスで、優しいお兄さんが小さい弟に、エクササイズをしてあげているみたいに、打ちやすい球を一生懸命返してあげていた光景である。交流とは言え勝負であるから、ことの当否についての評価は分かれるであろうが、決してバカにしてではなく、実直に相手をしてあげていたそれに、小生は安らぎを覚えたのである。

さて、新学期を迎え、一部の強豪校をのぞき、多くの学校では経験者・初心者が入り混じった新入部員を迎えていることと拝察する。何せ大学の体育会でも初心者が入ってくる時代である。勉強でもそうであるが出来る者達を指導するのは簡単である。そうではなく、初心者あるいはそれに近い者たちを、引っぱり上げ引っぱり上げ、部活を続けさせるには如何するか、バドミントンを嫌いにさせないためにはどうしたら良いのかが大きな課題となる。

いま、世の中は嘘と本当が入り混じり、ずるい奴らがはびこっている時代である。そのときに在って、吉野源三郎の言ではないが、『皆様方どう生きるか』である。小学校では道徳という評価に悩む教科も始まった。イヤ、それよりも、この号が出る頃には、11本5ゲームという新ルールが確定し、サービスの床上1.15mの規定の試行も始まっていることと思う。ラリーポイント制導入以来の大変革：試合運びや大会運営について、大きな影響が出、作戦を練り直す必要も出てくる。ますますご多用のことと拝察申し上げますが、パワハラやイジメ無しのJEF会員の皆様のご尽力をお願いしたい。

(編集部註：5月のBWF総会で新スコアリングは否決されました。サービスの高さ固定については採用されました。)

目 次

巻頭言

平成二十九年度全日本総合選手権大会レポート

海外出張報告

第一回全日本選手権大会について

第七回全日本教育系学生選手権大会

モルディブ男子ジュニア選手育成支援事業

表紙の人